



大窪 二編訳 「ハーバーバート・ノーマン全集」

長野県軽井沢でカナダ合同教会牧師の次男として生れ、占領中の一九四六年から五〇年にかけて駐日カナダ代表部首席、一九五一年にはサンフランシスコ対日講和会議のカナダ代表団首席随員として活躍し、「忘れられた思想家安藤昌益のこと」などの著作を残したハーバート・ノーマンの全集四巻が刊行される。第一巻「日本における近代国家の成立」はすでに四月下旬に発売され、第二巻も六月下旬刊行予定と、次々出版されることになっている。

ノーマンの没後二〇年をへて刊行されるこの全集は、これまでに翻訳・発表された彼の著作に加えて、未邦訳、未公開、および未亡人より提供された遺稿を収めたカナダやアメリカにもまだない画期的なもので、戦後、日本の近代史学に大きな影響を与えたノーマンとノーマン史学の全体像が浮きぼりにされている。各巻には、戦前から個人的にノーマンを知り、ノーマンの著作の大半を翻訳した編者による解題が付され、各篇の執筆時期、背景などを詳しく論証し、ノーマンの人と史観を知る手びきを与えている。

第一巻「日本政治の封建的背景」（初邦訳）は、過激国家主義団体の生成過程を述べることによって、日本における大衆統御の技術、一貫した膨脹主義者の戦術を分析する。他の十一論文（初邦訳、初公開遺稿）は、民主主義への強い意志と歴史認識を支えられ、終戦直後の日本の政治改革に直接かわりをもったノーマンの軌跡をたどる。「日本における過激国家主義団体の概要」「一九三〇年代の日本政治」「敗戦直後の日本政治」などの諸篇が収録されている。

第三巻「安藤昌益」 日本における封建社会の根底的批判者として、安藤昌益を正面から論ずる。性急な結論を避け、多くの留保を残しながら、昌益の全著作にわたって検討を加え、昌益の思想的位置づけを行なおうとする。日本民族の伝統のなから昌益を発掘することに よって、自主的に民主主義をつくりあげようとしていた終戦直後の日本人を激励した書である。「忘れられた思想家 安藤昌益のこと」など。

第四巻「日本の兵士と農民・歴史随想」 ノーマンの歴史的関心の中心テーマと幅広い問題意識、豊かな感覚に触れる。

第一巻「日本における近代国家の成立」 は、「日本における近代国家の成立」は、イギリス史学の伝統に立った幅広い展望のもとに、明治維新を歴史的に分析する。明治維新はいかなる要因によって成立したのか、維新後の政治権力の重心はどこにあり、現実的権力を左右したメカニズムは何か――近代国家を成立させた日本の政治の中心問題に具体的に取組んだ注目の書。ほかに、「政体書について」および「封建制下の人民」を併録。

カナダは独得な国で、世界有数の生活水準（高い一人当りGNP）と、ある種の開発途上国の特徴（例えば、一次産品の輸出への高い依存度、稀薄な人口密度、入植の必要を辺境の存在など）とを兼ね備えている。（だから例えば、カナダの経済発展の説明原理の一つ「主要産物仮説」は、開発論一般にとっても興味あることで、本書でもやや立ち入って論じられている。）トロント大学のI・ドラモンド教授のこの著書は、このように複雑で多面的なカナダの経済を全面的に概観、分析したものである。

カナダに対する日本の当面の関心は圧倒的にカナダ人の経済（まず何より、資源の供給国として、さらに財、資本の輸出先として）であって、文化等々は二の次であるというのが良くも悪しくも、正直なところであろう。それにもかかわらず、カナダ経済を要領よく概観した邦語の書籍はほとんどないというのが現状である。その意味だけでも、本書は貴重であった。（岩波書店発行）

第二巻「日本政治の封建的背景」（初邦訳）は、過激国家主義団体の生成過程を述べることによって、日本における大衆統御の技術、一貫した膨脹主義者の戦術を分析する。他の十一論文（初邦訳、初公開遺稿）は、民主主義への強い意志と歴史認識を支えられ、終戦直後の日本の政治改革に直接かわりをもったノーマンの軌跡をたどる。「日本における過激国家主義団体の概要」「一九三〇年代の日本政治」「敗戦直後の日本政治」などの諸篇が収録されている。

第三巻「安藤昌益」 日本における封建社会の根底的批判者として、安藤昌益を正面から論ずる。性急な結論を避け、多くの留保を残しながら、昌益の全著作にわたって検討を加え、昌益の思想的位置づけを行なおうとする。日本民族の伝統のなから昌益を発掘することに よって、自主的に民主主義をつくりあげようとしていた終戦直後の日本人を激励した書である。「忘れられた思想家 安藤昌益のこと」など。

第四巻「日本の兵士と農民・歴史随想」 ノーマンの歴史的関心の中心テーマと幅広い問題意識、豊かな感覚に触れる。

第一巻「日本における近代国家の成立」 は、「日本における近代国家の成立」は、イギリス史学の伝統に立った幅広い展望のもとに、明治維新を歴史的に分析する。明治維新はいかなる要因によって成立したのか、維新後の政治権力の重心はどこにあり、現実的権力を左右したメカニズムは何か――近代国家を成立させた日本の政治の中心問題に具体的に取組んだ注目

存在であるといつても過言でなからう。本書の優れた点は多々あるが、中でも

次の点が指摘できよう。

経済の過程は同時に政治その他の過程でもあるが、カナダでは、それは例えば、地域間の経済開発水準の較差、村米経済「従属」（外資所有・支配）の問題、保護関税、国有化、交通システムの料金体系、住宅供給、失業（人種的、地域の問題も絡む）等々の、一面では政治、社会問題でもあるものとして、特殊カナダの様相を示す。本書では、こうした問題を取扱う上で、潔癖なまでに、経済学の観点から論じ得ることに限定している。それは経済的側面が特に重要だからと考えるからでなく、むしろ、経済学が言い得ることと言えないことを明確にすることにより、政治



が誤った経済

的論拠を持ち

出して自己正

当化を試みる

ことを防止す

るためだと著者は言う。その結果、カナ

ダ経済のかえら問題がより明瞭になる

とともに、われわれが日本の類似の問題

を考える上でも、一つの見識として参考

にし得るように思われる。さらに、本書

が最新の事実資料と経済分析とを緊密に

結びつけて提示している点も、カナダ経

済の理解を皮相なものにしている。

原書は大学の入門教科書を意図したも

ので、一般人にも難しくはないし、また

理論と事実との結合を入門書に実現して

いるという点で、大学教育関係者にも問

題を提起している書であると信ずる。

（日本経済新聞社発行）